

第 1 回委員会の議論概要（大阪・関西万博のレガシー展開）

第 1 回成果検証委員会において、各委員・関係者から大阪・関西万博のレガシーについて次のような意見があった。

1. レガシー検討の方向性・全体論について

- ・ 閉会後に生まれる万博の価値を丁寧に検証・記録し、社会全体で共有することが重要。レガシーは施設に限らず、人々の行動変容とそのプロセスにあり、時間をかけて未来社会に生かされることを期待。
- ・ 来場できなかった人々にもレガシーを届けるため、教育的ツールや分かりやすい情報発信を通じて万博の意義と成果を広く伝えることが重要。
- ・ 重要な視点は、ソフトレガシー、跡地利用、剰余金の使途の三点。知や価値を集約する「場」のあり方を検討すべき。
- ・ 剰余金は、ハード／ソフト、関西／日本全体の軸で整理し、具体策を検討すべき。
- ・ 万博の評価は時間をかけて定まるものであり、関係者自身が成果を発信し続けることが重要。

2. 万博で創られた「つながり」について

- ・ 新技術の社会実装や国際会議の継続開催、デザイン資産の活用を通じ、ハード・ソフト・デザインのレガシーを実現したい。
- ・ 万博で披露された技術・サービスの社会実装と、国際的ビジネスイベントの継続開催が重要。
- ・ 中小企業やスタートアップ支援、アートやデザインの活用、人権や SDGs といった理念を事業の中核に据える必要がある。
- ・ 万博で実証された技術・システムを着実に社会実装し、全国展開につなげたい。
- ・ レガシーを国際社会へ還元すること。将来の万博開催国を見据え、人材育成などの支援を通じた国際的レガシー事業が可能。
- ・ 広域観光を促進し、関西・西日本全体の経済発展と国際交流につなげたい。

3. 万博を契機とした活動について

- ・ 70 年万博がそうだったように、関わったプロデューサーの方々が万博後も発信を続けると共に、そういった活動を応援することがレガシーの実現のために重要。
- ・ 万博精神を継承し人々の行動を促す仕組みの継続。多様性と一体性の理念に基づく文化・学術活動を支える柔軟な助成制度の創設が考えられる。
- ・ 「けいはんな万博」では産官学民連携の手応えがあり、開催地域とグローバル双方でのレガシー展開の可能性を確認できた。収益を活用した学術文化支援制度の創設を期待。

- ・ 最大のレガシーは「人」であり、特に若い世代が経験を未来につなげることが重要。挑戦を評価する文化を教育や起業支援などに広げたい。
- ・ 対話と共有の場を継続することへの期待は大きく、リアルとオンラインを活用した交流プラットフォーム自体がレガシーとなる。
- ・ 万博で生まれた熱気と機運を、今後の国際イベントへ継承していくことが重要。
- ・ ソフトレガシーとして、日本の魅力をデータやデジタルを通じて発信し、今後の国際イベントに生かすべき。
- ・ 世界が交流する場において、日本の強みや価値を万博後も継続して発信すべき。
- ・ データと IT を活用した運営手法を、次の万博や ASEAN 諸国へ継承していきたい。

4. 夢洲を活かした「場」の記憶について

- ・ 夢洲を若者の夢を育む文化・技術の拠点とするため、今後の開発指針が必要。
- ・ 跡地開発では、大屋根リング等を通じて「場所の記憶」を残しつつ、経済性と理念を両立した都市づくりが必要。
- ・ 人と人とのつながりを万博最大の成果として、世界に発信する拠点にしたい。
- ・ 自然と文化が融合した象徴として、大屋根リングと静けさの森は後世に残すべきレガシー。剰余金の活用も検討したい。
- ・ 残置される 200m の大屋根リングには、万博の記憶を継承する工夫が必要。映像アーカイブも活用し、大阪のまちづくりや夢洲での利活用を検討すべき。
- ・ 大屋根リングの残置と都市公園整備は、レガシー展開の中核となる。文化・音楽・ビジネスイベント等を通じ、交流の場としても活用可能。
- ・ ヴェネチア・ビエンナーレのような持続的な文化・芸術イベントや、学術的機能を備えた拠点づくりも検討できる。
- ・ 夢洲が海に開かれている特性を生かし、海路との連携も重要。
- ・ 大阪ヘルスケアパビリオンを先端医療・ライフサイエンスの発信拠点として活用。